



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ベルクソン『物質と記憶』の純粹知覚説における問題解決型の思考実験とその構成の方法としての仮象論によるメタ理論の構築 [全文の要約]
Author(s)	原, 健一
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13834号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78701
Type	doctoral thesis
File Information	Ken-ichi_Hara_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 原 健一

学位論文題名

ベルクソン『物質と記憶』の純粹知覚説における問題解決型の思考実験とその構成の方法としての仮象論によるメタ理論の構築

純粹知覚説とは、ベルクソン『物質と記憶』の中心的な理論の一つであり、物質にかんする实在論と観念論の争いを解決するための理論である。つまり、物質とはどのような存在者なのか、そして、その物質と呼ばれているものを私たちはどのように認識しているのかといった問題がここには関係している。

例えば目の前に赤いリンゴがあるとする。このような日常的な現象について「素朴な色観」をもつ人は次のように述べる。この赤色はリンゴという事物それ自体がもつ性質であり、通常環境で通常の知覚主体にそう見えるような「本当の色」を事物はもつ。だが、これまで多くの哲学者・科学者たちがこのような素朴な色観を否定してきた。このような素朴な色観の否定を一部とする物質についての哲学的主張をする立場が『物質と記憶』の扱う实在論と観念論である。

一方で、観念論は、次のように赤いリンゴの知覚経験を説明する。観念論によれば、赤いリンゴという一つの事物として私たちが見ている（と思い込んでいる）ものは、実は、意識に与えられている感覚データに過ぎない。観念論者はこのデータのことを「観念」と呼ぶ。つまり、私たちが知覚しているものは、外界に存在する赤いリンゴそれ自体ではなく、それについての観念に他ならない。そして、外界とか物質世界と私たちが呼んでいたものは、これらの観念を一つ一つ組み合わせることによって私たちが構成したものである。この意味で、私たちが物質世界と呼ぶものは、私たちの外部に実在するものではなく、意識によって想定されているものに過ぎない。以上が『物質と記憶』で想定されている観念論の主張内容である。

他方で、实在論は、私たちの主観的な想定に過ぎないと観念論者が見なす外界・物質世界は実在すると認める。この世界には、私たちがこの世界を恣意的に構成しているのだとしたらありえない秩序が備わっている。この秩序があることや、あるいはこの物質世界の秩序について体系的に記述する物理科学が成功をおさめていることを踏まえると、私たちとは独立の外界が存在するという想定には一定の説得力があると言わざるを

得ないと実在論者は考える。しかし、私たちの見て取るものの全てが実在するとは実在論は言わない。すなわち、実在論によると、私たちが見て取っているもののうち、広がりや幅といった延長は実在するが、そうした延長物がもつ（ように見える）色や匂いといった主観的な性質は実在しない。そうした主観的な性質は、脳や神経といった神経系の働きによって生み出されたものに過ぎない。これが『物質と記憶』で想定されている実在論の主張内容である。

このような観念論と実在論の考えに対してベルクソンは物質を「イマージュの総体」とする考えを提示した。その考えにおいては、まず、実在論と同じように外界・物質世界が実在することが肯定される。だが、ベルクソンは、実在論を斥けて、色も外界に実在するということを肯定する。ベルクソンは次のように述べている。

「[…]「イマージュ」ということで私たちが理解しているのは、観念論者が表象と呼ぶものよりは多く、実在論者が事物と呼ぶものよりは少ない、ある存在——「事物」と「表象」との中間に位置づけられた存在である。物質にかんするこの考え方は端的に常識の考え方である。[…] この色は[…] 対象の内にある。それらは、私たちの精神の状態ではなく、私たちの精神からは独立した存在の構成的要素である。したがって、常識にとって、対象はそれ自体において存在するのであり、他方で、私たちがそれを見て取るように対象はそれ自体色彩に富んでいる。これはイマージュなのだが、それ自体で存在するイマージュである。」(MM1-2)

純粹知覚説とは、このような色などの性質を備えて外界に実在する物質を、私たちは直接的に見て取っているとする立場である。つまり、ベルクソンの純粹知覚説とは、観念論と実在論において想定されている意識の描像を斥け、知覚経験においては、意識は対象そのものに到達していると主張するものである。

この純粹知覚説について本論文では以下の二つの問題が提起された。

(1) 純粹知覚説は、今日的な見解と比較してみると、色覚理論としてはひじょうに危うい主張をしているように見える。というのも、ベルクソンの色覚論は、第一に、今日でも有力とされる、ロック、ガリレイ、そしてニュートンの考え（事物それ自体には色はないと主張する色の非実在論）に反しているし、第二に、色に関する科学的知見とも一致しないように思われる。しかし、この純粹知覚説の主張には、心身問題の困難の緩和という伝統的な問題や、日常的な世界像と科学的な世界像の両立という今日的な問

題に対する、ベルクソン『物質と記憶』の解答が賭けられている。では、純粹知覚説は、この現代的知見からの乖離という点において、即座に斥けられるべきなのか。そして、その純粹知覚説を支えとする諸々の主張も同時に棄却されてしまうのだろうか。

(2) ベルクソンは、『物質と記憶』の哲学的方法について、それは、「人間的な経験」を越えて経験の「源泉」へと「赴く」ものだ述べている (MM205)。つまり、このようにして肯定されている純粹知覚説は単なる「証明」によって肯定されているのではないようだ。では、『物質と記憶』におけるベルクソンはいかなる哲学的方法によってこの純粹知覚説を肯定しようとしたのか。そして、その方法とは、哲学的議論にとって有効なものなのだろうか。

本論文は、問い(1)について、純粹知覚説の主張の内容を詳細にすることによってこの理論それ自体は現代的な批判にも応答しうる内実をもつことを示そうと試みた。そして、問い(2)については、ベルクソンが『物質と記憶』で用いている独特な哲学的方法の内実を明らかにし、それが一つの哲学的方法として有効であることを示そうと試みた。

以上のこと示すべく、本論文は以下のように議論を進めた。

本論文第一部では、ベルクソンが『物質と記憶』で依拠している哲学的方法が示された。

第一章の前半部では、ベルクソンが純粹知覚説を肯定する議論を論点先取の虚偽から救い出し、それが最善の説明からの推論であることを示した。また、後半部では、石井の研究を批判するという形で、ベルクソンが『物質と記憶』第一章末尾で提示している議論の内実を定式化した。それは、實在論の推論を分析することによって組み立てられた演繹的な推論として特徴づけられる。つまり、ベルクソンが比喩をもちいる哲学者であるとか、直接的な経験をそのまま実在と見なすといったような批判からは、少なくとも部分的にはベルクソンを擁護することができる。しかし、これらの特徴づけ(最善の説明からの推論や演繹的な推論)は、ベルクソンが自身の用いた方法論について述べる際に使う「人間的な経験の向こう側」とか「経験の源泉」といった語の内実を明らかにするものではなく、ひいては、そうしたところに「赴く」とする彼の議論の道筋の内実を解明するものではない。

第二章では、過去の実在性を肯定する際にベルクソンが用いている哲学的方法の内実を示した。その際、「私の現在」という時間経験の概念に私たちは着目した。Worms やドゥルーズの解釈では、ベルクソンは、直接的な経験に過去の記憶が含まれることから、

過去が実在するという推論を行なっていることとなる。しかし、ベルクソンの議論を詳細に辿ると、彼が行なっていることはまったく別のものであることがわかる。すなわち、ベルクソンは、「私の現在」という直接的な時間経験を起源として、そこから、過去の実在論が否定され、現在主義が肯定されるに至るプロセスを辿り直している。このようにすることで自然な世界の見方を転換するという方法——私はそれを「仮象論」と呼ぶ——がベルクソンの哲学的方法である。つまり、ベルクソンにとっての直接的な経験とは、そこに含まれるものの実在性がそのまま肯定されるようなものではなく、むしろ、仮象の源泉として位置づけられる。

第三章では、『物質と記憶』の一般観念論をめぐる、意識の諸平面の理論の機能を明らかにした。意識の諸平面の理論は、一般観念の獲得という現象を説明しようとする概念論や唯名論よりもこの現象を上手く説明できることによってだけ肯定されているように見える。より具体的には、意識の諸平面の理論は、概念論と唯名論の循環を解消する理論として肯定されているように思われる。しかし、実のところ、意識の諸平面の理論それ自体は、一般観念の獲得プロセスにかんする概念論と唯名論の説明に見出される循環の解消には貢献していない。そうではなく、意識の諸平面の理論は、概念論と唯名論の二者択一という意味での循環からの脱却に貢献している。その際、ベルクソンは、概念論と唯名論の用いる概念体系が形成され、概念論と唯名論の二者択一を迫られるに至るプロセスを示すために意識の諸平面の理論を導入している。つまり、意識の諸平面の理論は、一般観念の獲得プロセスを説明する理論であるだけでなく、既存の哲学的論争がどのように成立するのかを説明するメタ理論でもある。ここから、意識のメタ理論を作り上げることによって意識の理論を作り上げるというベルクソンに独自の哲学的方法が示された。

第二部では、純粹知覚説の内実を規定した後に、その純粹知覚説を肯定する際にベルクソンが用いている方法を示した。

第四章では、ベルクソンの色覚論の内実を規定した。それは一見したところ、今日ではすでに力を失った色の実在論であるように思われる。そこで、投影説、傾向性理論、実現基盤機能主義といった諸説との比較を通して、ベルクソンの色覚論が、傾向性理論の一種である反応依存性理論に似ていることを示した。また、ベルクソンは、色という傾向性を行為の傾向性で説明するため、傾向性理論に向けられる無限後退の批判を回避できている。またベルクソンは、色の恒常性という現象についても、行為の有益性を目指すという知覚経験の特性によって説得的に説明する。このようなベルクソンの色覚論

においては、一次性質と二次性質という存在論的な区別は相対化され、両者は一つの事物のもつ二つの側面とされている。そして、知覚経験それ自体は、行為性・超越性・直接性という三つの特性をもつものとして規定されることとなる。

第五章では、純粹知覚において与えられているのは物質世界の部分か全体か、という解釈上の問いを扱った。私は、物質的対象の全てが知覚に与えられるとベルクソンが述べている箇所の意味を明確化して物質世界の全体が与えられるプロセスを具体化することによって、そこで与えられている全体の内実を規定した。そのプロセスとは、物質世界の質的な側面を無視して量的な側面に注目するというもの、言い換えれば、等質的な空間という形式を用いて物質世界を脱生成化・脱時間化していくというプロセスであった。そして、このプロセスを通して与えられる物質世界全体とは全体の「表象」である。したがって、純粹知覚において与えられているのは、物質世界の実質的な部分と、物質世界全体の表象であり、ここには矛盾はない。

第六章では、第四章と第五章で内実の規定された純粹知覚説がどのように肯定されているのかを示した。その際、第一部で明らかにされたベルクソンの哲学的方法を反映させる形で純粹知覚説の肯定の方法を示した。その方法とは、仮象論を用いたメタ理論の構築というものであった。つまり、行為のために外界をとらえるという知覚経験の性向によって、物質と知覚意識を峻別する概念枠組みが形成され、實在論と觀念論の二者択一を強いるような哲学的問題が成立するプロセスを、ベルクソンは辿り直している。このようにして、物質と知覚意識の存在論的な区別を相対化し、両者を一つの事物のもつ二つの側面として扱うことが可能になる。そして、この新たな概念枠組みのもと、色の物理的基盤を想像させる思考実験を行ない、私たちが知覚対象を直接的に見て取っているという純粹知覚説の主張が肯定される。ここから、ベルクソンにとっての思考実験のよし悪しの基準が示された。すなわち、悪い思考実験とは、解決不可能な問題を提示するだけの思考実験である。ベルクソンは、そのような悪い思考実験に用いられる概念を再規定することによって思考実験の設定の内部に哲学的問題に対する解答が見出されるような思考実験を作り上げる。このいわば問題解決型の思考実験がベルクソンにとってのよい思考実験である。

以上から本論文で提示された問題に対する解答を示そう。本論文が答えるべき一つめの問題は以下のものであった。

(1) 純粹知覚説は、今日的な見解と比較してみると、色覚理論としてはひじょうに危うい主張をしているように見える。しかし、この純粹知覚説の主張には、心身問題の困難の緩和という伝統的な問題や、日常的な世界像と科学的な世界像の両立という今日の新たな問題に対するベルクソン『物質と記憶』の解答が賭けられている。では、純粹知覚説は、この現代的知見からの乖離という点において、即座に斥けられるべきなのか。

この問い(1)に対する解答は次のようになる。――序論ならびに第四章で確認したように、純粹知覚説は、一見したところ色の実在論という今日では力を失った色覚論の一種に見える。しかし、『物質と記憶』の色覚論を詳細に見ていくことによって、純粹知覚説は、色の実在論と非実在論のあいだを行く中道派の理論、具体的には、知覚を行為との連関のもと捉える傾向性理論に相当するということを本論文は明らかにした。そして、このベルクソンの色覚論は傾向性理論の難点を(少なくとも部分的に)克服している。この意味で、即座に斥けられるべきではない、一考に値する選択肢としてベルクソンの色覚論を位置づけることができたはずだ。したがって、ベルクソンの色覚論を即座に誤りと判断するべきではない。ひいては、心身問題の困難を緩和する、科学的な世界像と日常的な世界像は両立可能なものであるといったベルクソンの主張は、少なくとも、純粹知覚説が即座に斥けられるべきだという理由では否定されるべきではない。本論文においては、これら二つのベルクソンの主張それ自体の妥当性について詳細に吟味することはできないが、それらが基づく純粹知覚説が即座に斥けられるべきではないということだけは示したつもりである。以上が(1)に対する解答である。

もう一つの問いは次のものであった。

(2) ベルクソン『物質と記憶』の哲学的方法は、「人間的な経験」を越えて経験の「源泉」へと赴くものと言われている。このようにして肯定されている純粹知覚説は単なる「証明」によって肯定されているのではないようだ。では、『物質と記憶』におけるベルクソンはいかなる哲学的方法によってこの純粹知覚説を肯定しようとしたのか。

この問い(2)に対する答えは次のようになる。――ベルクソンが『物質と記憶』で依拠している哲学的方法は、仮象論によってメタ理論を構築することによって思考実験をモデリングし直すという方法である。まず、仮象論とは、知覚経験の性向を特定し、

その性向によって、いかにして特定の哲学的立場とそれらの依拠する概念が成立するの
かを辿り直すという方法である。そして、概念形成の過程を辿るという方法によって提
示されるものは、単なる意識の理論ではなく、意識の理論についての理論（意識のメタ
理論）である。例えば、過去の実在論と現在主義の依拠する概念が作られ、それらの概
念に基づいて哲学的問題が立てられるプロセスが示されたり（本論文第二章）、あるい
は、概念論と唯名論の依拠する概念が作られ、それらの概念に基づいた一般観念論とい
う哲学的問題が成立するプロセスが示されたり（本論文第三章）、そして、実在論と観
念論が依拠する概念が作られ、それらの概念に基づいて物質の本性やその物質を知覚す
るという経験の本性についての哲学的問題が立てられるプロセスが示されたりする（本
論文第六章）。とりわけ、物質とその知覚の本性をめぐるこの三つめのメタ理論が、本
論文が明らかにしようとしてきた純粹知覚説の正当化の方法という点において重要で
ある。すなわち、一次性質と二次性質の存在論的な区別という哲学史において（そして
科学的な色覚論もこの区別に依拠していることに鑑みれば科学史においても）長いあい
だ受け入れられてきた伝統的な考えを相対化して、その区別を概念上の区別に過ぎない
と見なす純粹知覚説の主張を肯定する際に、この方法が以下のように用いられている。
知覚経験とは、有益な行為を成し遂げるべく、物質世界を、秩序といった安定した構造
をもつ存在者として捉えようとするものである。このような性向をもつ知覚経験は計
測・計量可能なもののみから成る存在者として物質世界を把握しようとする。これによ
って、物質と意識が概念的にも存在論的にも区別され、そのようにして一次性質と二次
性質という概念、ならびにその概念に基づいた物質の本性とその物質を知覚するという
経験の本性にかんする哲学的問いが提出される。この哲学的な概念と問題の形成過程を
示すことによって、物質とその知覚の本来の姿が見失われ、解決不可能な問題が立てら
れるプロセスが明示される。これによって、一次性質と二次性質の存在論的区別は相対
化され、相対化された概念上の枠組みに基づいて形而上学的な思考実験が立て直される。
以上が、「仮象論によってメタ理論を構築することによって思考実験をモデリングし直
すという方法」であり、これこそがベルクソンが『物質と記憶』で用いている哲学的方
法である。以上が（２）に対する答えである。

最後に、これまでの考察に基づいて、ベルクソンが自身の方法について述べた次の引
用部の解釈を提示しよう。

「それは、経験を探し求めてその源泉にまで赴くこと、あるいはむしろ、経験が私たちにとっての有用性の方向に向きを変えながらまさに人間的な経験となる、その決定的な転回点の向こう側に赴くことであろう。」(MM205)

まず、ここでいう「人間的な経験」とは、知覚経験の性向に従って作り上げられた概念を通してさまざまな物事のあり方を判断していくような経験のことである。例えば、一次性質と二次性質を存在論的に別のものとする概念枠組みのもとで物質と知覚意識を別々の存在者だと見なすことである。このようにして、仮象へと人は陥っていくこととなる。そして、「経験の源泉に赴く」とは、このようにして作り上げられた概念と理論の成立を辿り直すことによって、私たちが探究すべき実在へと目を向け直すことであり、その意味で「経験の源泉」とは、出来合いの概念とその体系に基づいた抽象的な体系ではない、本来解明すべき実在のことを意味する。なぜそれは「源泉」と呼ばれるのか。それは、この実在にこそ、私たちの解決しようとしていた哲学的問題の解決策が内在しているからであり、問題解決型の思考実験とは、このような意味での実在を思考実験の中に再び回復させたものに他ならない。

以上のように、ベルクソンにとっては、単に哲学における既存の学説を受け入れそれらのどれかに軍配をあげるのではなく、それらさまざまな学説がいかにして可能になるのかをも解明するということこそが哲学の達成すべき目的である。そして、この目的を達成するためには、概念分析や定義やアーギュメントの構成、命題間の論理的関係の吟味などふつう私たちが哲学の依拠する方法と考えているものではなく、仮象論によってメタ理論を提示することを通して思考実験をモデリングし直すという方法が有効である。